

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	心理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	岡野 邦夫						

授業の概要	心理学は人間行動学であり、科学的に人間の精神的・身体的行動を理解しようとする学問である。この授業では発達心理学的視点を取り、受精から胎内期、乳幼児期を経て老年期までの人間の行動発達を考える。また、広範に人間行動を理解するため、ときには社会心理学、学習心理学、臨床心理学などの知見も紹介する。			
学習到達目標	心理学的視点から人間行動を理解できるようになり、また心理学的知見を理解する。そのことにより将来理学療法士として患者、および周囲のひとびとと接するときに、それらの人々の行動を少しでも深く理解できるようにする。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	・ 遺伝的伝達、受精、 卵体期胎芽期・胎児期 ・ 出産、新生児期、原始行動と原始反射		
	3-4	・ 記憶とは、最初の記憶、 記憶のメカニズムと種類 ・ 視覚、聴覚、その他の感覚の発達		
	5-6	・ 乳児の全身運動の発達、環境とレディ ネス、基本的生活習慣、言葉の発達 ・ 愛着の形成、学習・刻印づけ		
	7-8	・ 人間関係、児童期の運動発達 ・ 幼児期の運動発達、第一次反抗期 ・ 知的発達、仲間関係		
	9-10	・ 第二次反抗期、成人前期・中年期・老年 期前期・後期		
授業方法	講義			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	授業は必ず毎回出席し理解するように心がけること。黒板は説明のために使用する。			
教科書等	必要な資料はその都度配布する。配布資料は毎回持ってくること。			
参考図書等	参考図書は必要に応じてその都度指摘する。			
関連科目	医療統計学 その他の関連科目			
コアカリキュラム対応				
最近の国試出題傾向	最近の国試の出題傾向と出題された問題については授業中に指摘する。			

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	哲学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	橋詰 史晶 ○哲学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	本講座では、まず哲学というものが一般にどのような営みであるかについて概説したのち、主に現象学という学派の哲学を紹介していく。現象学は20世紀以降の哲学における重要な学派であり、私たち自身の体験から出発するところに特徴がある。現象学の思考法を学ぶことで、身近な世界を新たな視点から眺める柔軟な思考力を身に付ける。				
学習到達目標	(1) 一般に哲学がどのような学問であるかを理解する。 (2) 現象学の思考法を学ぶことで、身近な世界を新たな視点から眺める柔軟な思考力を身に付ける。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	哲学とは何か			
	3-4	科学的世界観以前の世界			
	5-6	他者について			
	7-8	現象学的な身体			
	9-10	ケアの現象学			
授業方法	講義				
成績評価の方法	定期試験(100%)				
履修上の留意点	授業時間外の課題は課さないが、そのぶん授業中は板書に集中すること。				
教科書等	なし				
参考図書等	授業で扱ったテーマについて更に学びたい学生のために、毎回参考文献を紹介する。				
関連科目	特になし				
コアカリキュラム対応	なし				
最近の国試出題傾向	特になし				

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	政治学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	岸田 健司 ○政治学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	政治学の基礎的理論を学びつつ、同時に、現代政治を理解するために必要な政治制度や政治問題について学習する。適宜時事問題の解説を行う。また、論述に慣れていない学生も多いため、参考のため模範解答例を配布し、定期テストの対策も行う。			
学習到達目標	政治学の基礎知識と、現代政治を理解するための基本的知識を習得する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	①政治権力とは何か ②政治的 リーダーシップ ③政治イデオロギーと政治的無関心		
	3-4	①デモクラシーをめぐる諸問題 ②議会政治 ③主要国の政治制度		
	5-6	①政党と政党制 ②選挙の機能 ③選挙制度		
	7-8	①圧力団体の機能 ②行政国家と官僚制 ③日本政治の特色		
	9-10	①大衆民主主義の諸問題 ②国家と政治体制 ③国際政治		
授業方法	講義形式で授業を進めるが、質問を歓迎し（適切な質問をした学生にはプラス点を与える）、できるだけ双方向の授業をしていきたい。			
成績評価の方法	定期テストで評価する。(100%) 定期テストは、あらかじめ4問を提示し、その中から2問出題する。			
履修上の留意点	私語・居眠りは厳禁。注意しても修正されない場合はマイナス点を付ける。			
教科書等	加藤秀治郎 『はじめて学ぶ政治学』 実務教育出版			
参考図書等	特になし			
関連科目	特になし			
コアカリキュラム対応	特になし			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	歴史学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	江川 ひかり, 矢本 彩 ○歴史学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	歴史学的問題視角・思考方法を身につけたうえで、生命の誕生、生命の進化の歴史、人類の歴史という歴史学の基礎知識を養う。次に、主として西アジアにおける古代から現代に至る歴史を、イスラーム文明とオスマン帝国における政治および社会とを中心に考察する。			
学習到達目標	歴史学が、高校教育までの単なる「暗記科目」ではなく、歴史的事象に関して個々人が思考して解釈していく学問であること、歴史学とはそもそも生命の進化のリレーであり、学生個々人がそのバトンを受け取った存在であることを理解する。次に、西アジアにおける一神教の発展、イスラームの基本的考え方、イスラーム文明の発展、そしてオスマン帝国の盛衰を理解することによって、イスラームへの偏見をなくし、歴史学的重要性を確認する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	46億年の生命の歴史 生命が誕生してからホモ・サピエンスに至る進化の歴史を跡づける。		
	3-4	日本における産の現場 命のバトンを受け取ったわたくしたちが生まれる産の現状を考察する。		
	5-6	一神教の発展とイスラーム文明 ユダヤ教、キリスト教、イスラームと発展する一神教の系譜を理解する。		
	7-8	キリスト教文明とイスラーム文明 同じ一神教の姉妹宗教であるキリスト教とイスラーム文明の融和の歴史を考察。		
	9-10	オスマン帝国の政治と社会 最後のイスラーム王朝といわれるオスマン帝国の政治と社会を理解する。		
授業方法	講義および視聴覚映像を利用			
成績評価の方法	毎回の感想レポート（３０％）、試験（７０％）			
履修上の留意点	歴史は暗記科目ではなく考える科目であるので、授業中もしっかり講義を聞き、考えることが不可欠。			
教科書等	毎回レジュメを配布する。			
参考図書等	小杉泰・江川ひかり編『ワードマップ イスラーム』新曜社、２００６．			
関連科目	特になし			
コアカリキュラム対応	なし			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	物理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	鈴木 一男						

授業の概要	ヒトの動作を分析するのに有用なツールとして力学がある。本科目は力学を中心に学び、力やモーメントについて理解を深める。			
学習到達目標	①運動の法則を説明できる。 ②角運動量とモーメントについて説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	物理学的考え方とは 物理量の次元と単位		
	3-4	位置、速度、加速度 運動の法則		
	5-6	仕事とエネルギー		
	7-8	角運動量とモーメント		
	9-10	まとめ		
授業方法	概念の説明、例題の解説、問題演習			
成績評価の方法	筆記試験(100%)			
履修上の留意点	不明な点は質問して解決すること			
教科書等	プリントの配布			
参考図書等				
関連科目	運動学Ⅰ(1年)、運動療法学Ⅰ(2年)			
コアカリキュラム対応				
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	生物学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	藤田 隆夫 ○生物学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	生物の特徴を5項目に取りまとめて、各特徴を学習する。				
学習到達目標	医療関係を志す者として必ず知っておくべき基礎内容を理解する。				
授業内容	回	内 容	回	内 容	
	1-2	①生物の特徴 生物の多様性と共通性 細胞の種類と構造 組織と器官			
	3-4	②遺伝とDNA 遺伝の法則 遺伝子の本体 タンパク質の合成			
	5-6	③同化と異化 代謝とエネルギー ATP、酵素、呼吸			
	7-8	④体内環境の維持 体内環境と体液 腎臓と肝臓 神経とホルモンによる調節、免疫			
	9-10	⑤生殖と発生 配偶子の形成 受精と発生 器官形成			
授業方法	毎回、基礎的なプリントを配布し、内容を説明する。プリントは教科書の代用として使用する。				
成績評価の方法	筆記試験により評価する。(100%)				
履修上の留意点	教科書丸暗記のような学び方ではなく、生きた知識としてこれからの職業に役立つ生物学を身につけて欲しい。				
教科書等	教科書は指定しない。高校時の教科書、配布プリントをきちんと学習して欲しい。参考書として生理学(第5版)活用。				
参考図書等	スクエア最新図説生物(第一学習社)(五訂版)・サイエンスビュー生物総合資料(実教出版)・生物図録(数研出版)他、1000円程度で高校生物を全て網羅していてオールカラー、おすすめです。				
関連科目	生理学Ⅰ・Ⅱ(1年)				
コアカリキュラム対応					
最近の国試出題傾向					

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	情報処理演習			単位数	1	時間数	40
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	実習
担当講師	植竹駿一						

授業の概要	情報化社会を迎える中で情報の選択や情報処理の能力が必要とされる。本講義では、Microsoft officeのWord、Excel、PowerPointなど基本的なソフトウェアの使用法から課題の作製を通じて情報社会に必要な知識と技能を身につけることを目的とする。			
学習到達目標	・ 情報の取り扱いについての知識を整理する。 ・ officeソフトを使用した課題を作成し情報処理の方法を理解する。 ・ 課題に至る過程を形式的に作り上げる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	情報とは 情報の取り扱いについて 課題1の提示	11-12	基本課題3 統計処理の方略
	3-4	基本課題1 提出日 Wordの使用方法	13-14	基本課題3 課題3の提出とフィードバック 課題4の提示
	5-6	基本課題2 課題2の提示 ショートカットキーに関して	15-16	応用課題4 PowerPointに関して
	7-8	基本課題2 Excel関数に関して	17-18	応用課題4 課題作成準備
	9-10	基本課題2 & 3 課題のフィードバックと課題3の提示	19-20	応用課題③ PowerPointを使用したプレゼンテーション（希望者のみ）
授業方法	初回授業と各課題の前には講義を行う。 課題提出に向けた自己学習			
成績評価の方法	課題(100%) 課題の内容にて評価を行う。			
履修上の留意点	パソコンの基本的な使い方を予習しておくことが望ましい。			
教科書等	適宜資料を配布する。			
参考図書等	情報の基礎・基本と情報活用の実践力 第3版			
関連科目	情報リテラシー			
コアカリキュラム対応				
最近の国試出題傾向				

理学療法学科 I 部 シラバス

科目名	体育実技 I			単位数	1	時間数	40
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	実習
担当講師	本多 尚基 河野 隆志 ○体育教育の実務経験に基づく講義						

授業の概要	・ 体力測定に関する知識を修得するとともに、自身の体力レベルを確認する。 ・ 今後、理学療法士はスポーツ現場においても活躍が期待されている。そのため、各スポーツ種目の体験によりルール・特性を把握し、スポーツ現場で理学療法を提供するための基礎的知識・能力を習得する。 ・ 実際の競技経験を通じて、技能スキルの獲得（運動学習）の過程を学ぶ。			
学習到達目標	・ 各スポーツ種目のルール、特性、基礎的技術を理解する。 ・ 各スポーツ種目で外傷が起こりやすい運動を把握し、スポーツ外傷に関する知識を理解する。 ・ 技能スキル獲得（運動学習）の過程を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	体力測定 体力測定を実践し、現在の体力レベルを認識する	11-12	バドミントン サーブやスマッシュなどの基礎的技術を習得する
	3-4	バレーボール オーバーパスやレシーブ、サーブなどの基礎的技術を習得する	13-14	バドミントン シングルス、ダブルスのゲームを通じて基礎的技術を実践する
	5-6	バレーボール ゲームを通じて基礎的技術の実践とチームプレーについて理解する	15-16	バスケットボール ドリブルやパス、シュートなどの基礎的技術を習得する
	7-8	フットサル ドリブルやパスなどの基礎的技術を習得する	17-18	バスケットボール ゲームを通じて基礎的技術の実践とチーム戦術や戦略を考え、実践する
	9-10	フットサル ゲームを通じて基礎的技術の実践とチーム戦術や戦略を考え、実践する	19-20	総括 体育を通じて運動やスポーツ活動の役割や意義を理解する
授業方法	実技を中心に展開し、ゲームの運営については学生主導で行う。			
成績評価の方法	体力測定、実技実施状況、授業内発表とレポート課題（100％）			
履修上の留意点	授業に出席する際は運動に適した格好で臨み、室内履きを着用すること。安全面上、室内履きを忘れた場合は参加不可とする。なお、ピアスや貴金属など実技を行う上で危険性の高いものの着用は認めない。			
教科書等	特になし			
参考図書等	特になし			
関連科目	健康科学（1年）　体育実技Ⅱ（2年）　体育実技Ⅲ（3年）　スポーツ社会学(2年)			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	英会話Ⅰ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	浅田 幸善 ○英語教育の実務経験を活かした講義						

授業の概要	解説と実践練習を通して、英会話の基本ルール（文法・音声・表現）を身につけられるようにする。基本的には一般的な会話を想定しているが、後期には理学療法士(PT)の活動を念頭に置いた会話を採り入れる。会話には「聴く」ことも重要なのでリスニングの練習も行う。また、英語力向上に欠かせないリーディング力を養成するため、やさしめの英文も合わせて読む。			
学習到達目標	会話に必要な基礎力の養成を目的とする。英語を話し、聴くための基本ルールやパターン・表現をしっかりと身につけられるようにする。また、一般基本語彙（2000語レベル）のほか身体部位など関連分野の基本語の習得も図る。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	英語力確認テスト 授業の進め方・学習法ガイダンス 英語の基本ルール (1)		
	3-4	英語の基本ルール (2) 英語を読む (Sammy's PT Adventure) 会話表現・リスニング練習		
	5-6	英語の基本ルール (3) 英語を読む (Sammy's PT Adventure) 会話表現・リスニング練習		
	7-8	英語の基本ルール (4) 英語を読む (Sammy's PT Adventure) 会話表現・リスニング練習		
	9-10	英語の基本ルール (5) 英語を読む (身体のおくみ) 会話表現・リスニング練習		
授業方法	講義			
成績評価の方法	出席点 (10%)、語彙・リスニング小テスト (20%)、期末試験 (70%)の割合で評価する。評価は、100点満点に換算して、優(80点以上)、良 (70～79点)、可 (60～69点)、不可 (60点未満) とする。			
履修上の留意点	授業を受けているだけでは、英語力の向上は望めないなので、授業外での学習にも期待します。			
教科書等	特になし			
参考図書等	必要な教材・資料は授業中に配布する			
関連科目	医学英語 (2年)			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	英会話Ⅱ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	浅田 幸善 ○英語教育の実務経験を活かした講義						

授業の概要	解説と実践練習を通して、英会話の基本ルール（文法・音声・表現）を身につけられるようにする。基本的には一般的な会話を想定しているが、後期には理学療法士(PT)の活動を念頭に置いた会話を採り入れる。会話には「聴く」ことも重要なのでリスニングの練習も行う。また、英語力向上に欠かせないリーディング力を養成するため、やさしめの英文も合わせて読む。			
学習到達目標	会話に必要な基礎力の養成を目的とする。英語を話し、聴くための基本ルールやパターン・表現をしっかりと身につけられるようにする。また、一般基本語彙（2000語レベル）のほか身体部位など関連分野の基本語の習得も図る。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	英語の基本ルール (6) 英語を読む（身体のおくみ） PTの会話 (1)とリスニング練習		
	3-4	英語の基本ルール (7) 英語を読む（病院） PTの会話(2)とリスニング練習		
	5-6	英語の基本ルール (8) 英語を読む（リハビリテーション） PTの会話 (3)とリスニング練習		
	7-8	英語の基本ルール (9) 英語を読む（運動） PTの会話 (4)とリスニング練習		
	9-10	英語の基本ルール (10) PTの会話 (5) まとめ		
授業方法	講義			
成績評価の方法	出席点 (10%)、語彙・リスニング小テスト (20%)、期末試験 (70%)の割合で評価する。評価は、100点満点に換算して、優(80点以上)、良 (70～79点)、可 (60～69点)、不可 (60点未満) とする。			
履修上の留意点	授業を受けているだけでは、英語力の向上は望めないなので、授業外での学習にも期待します。			
教科書等	特になし			
参考図書等	必要な教材・資料は授業中に配布する			
関連科目	医学英語（2年）			
最近の国試出題傾向	特になし			

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	健康科学			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	河野 隆志						

授業の概要	理学療法士は健康に関連した諸課題に向き合うことが求められる。そのために、健康増進や疾病予防などの幅広い知識を身につけることが重要である。			
学習到達目標	健康の概念・定義が説明できる。 健康に携わる専門職の役割を説明できる。 ライフスタイルの変化に伴う健康について理解できる。 ストレスと健康の関係を説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	健康の定義・概念 健康に影響をもたらす要因 健康寿命について		
	3-4	社会環境と健康 生活や健康に関わる住環境 生活や健康に関わる専門職の役割		
	5-6	ライフスタイルと健康の関連 人生の各期において抱える健康面の課題 加齢に伴うライフスタイルの変化		
	7-8	生活習慣と予防 食習慣が健康に与える影響 運動習慣が健康に与える影響		
	9-10	ストレスと健康		
授業方法	講義			
成績評価の方法	筆記試験又はレポート課題（100％）			
履修上の留意点				
教科書等	講義資料を適宜配布			
参考図書等				
関連科目	病理学、リハビリテーション概論、理学療法概論			
コアカリキュラム対応	B-1-1,B-2-1,B-2-2,B-4-1,B-4-2,B-4-3			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	情報リテラシー			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	清川 一樹、高柳 清美						

授業の概要	対象者を取り巻く種々の問題点を解決するために我々は必要とされる情報を「探し出し」「精査し」「使える」能力が必要とされる。この能力を情報リテラシーといい、その能力の重要性は日を追うごとに増している。また、SNSなどの情報ツールを利用する際に情報の取り扱いを知らなければ情報の漏洩を招きかねない。本講義では、これらの情報収集や探索の方法について学ぶ。			
学習到達目標	情報の重要性を認識できる。 情報収集の探索を効果的に実践できる。 情報の批判的吟味ができる。 情報管理の重要性について説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	現代社会における情報の重要性 保健医療領域を中心に		
	3-4	情報探索について 効果的に能率的に情報を探索する手法 一次資料、二次資料、三次資料		
	5-6	収集した情報の吟味について 探索過程の評価 情報の批判的解釈		
	7-8	情報の管理について 情報の効果的な管理 情報の漏洩について		
	9-10	情報の応用的利用について 情報を利用した新規の応用方法の模索		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	情報の取り扱い方に関して事前に予習をすることが望ましい。			
教科書等	講義資料を適宜配布			
参考図書等				
関連科目	情報処理演習			
コアカリキュラム対応	A-2-1,A-3-1,A-6-3,B-5-3			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	解剖学Ⅰ（筋・骨格系）			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	江川 薫 ○解剖に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	理学療法士として知らなければならない基礎となる人体の正常構造を学習する。本講義では、人体の動きに直接関与する運動器系としての「骨格」「関節と靱帯」「骨格筋」について講義し、骨格模型等を用いて視覚的観察を併用することにより、将来の治療を行う際の解剖学的知識を身につける。					
学習到達目標	「骨格」：人体を構成する骨の構造を説明できる。 「関節と靱帯」：骨の連結（広義の関節）の正常な構造と機能を説明できる。 「筋系」：骨格筋の構造（起始・停止、走行、神経支配）を理解し、その作用を説明できる。					
授業内容	回	内 容		回	内 容	
	1-2	・ 骨の肉眼的構造、顕微鏡的構造、発生 ・ 椎骨の形態		11-12	・ 上肢の連結 ・ 下肢の連結	
	3-4	・ 胸郭（胸椎、肋骨、胸骨）の形態 ・ 上肢の骨の形態		13-14	・ 筋線維の種類、骨格筋の構造 ・ 上肢の筋の形態	
	5-6	・ 上肢の骨の形態 ・ 下肢の骨の形態		15-16	・ 上肢の筋の形態 ・ 下肢の筋の形態	
	7-8	・ 下肢の骨の形態 ・ 頭蓋の形態		17-18	・ 下肢の筋の形態 ・ 頭部の筋の形態 ・ 頸部の筋の形態	
	9-10	・ 関節靱帯総論 ・ 脊柱、胸郭の連結		19-20	・ 胸部の筋の形態 ・ 腹部の筋の形態 ・ 背部の筋の構造	
授業方法	教科書を中心に板書で講義し、人体構造を視覚的に理解するために骨格模型、図のプリントの配布をもとに講義する。					
成績評価の方法	前期と後期の学期末試験（100％）の総合成績により評価する。					
履修上の留意点	人体構造を立体的に理解し、骨および筋との相互関係を考察しながら学習する。 解剖学用語が多数あるので、毎回復習して次の講義に備える。					
教科書等	「標準理学療法学、作業療法学3版 解剖学」 医学書院 「ヴォルフ カラー人体解剖学図譜」西村書店					
参考図書等	「分担解剖学（第1巻）」 金原出版					
関連科目	運動学、生理学、機能解剖学Ⅰ・Ⅱ					
コアカリキュラム対応	C-1-3					
最近の国試出題傾向						

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	解剖学Ⅱ(循環器,内臓器)			単位数	2	時間数	48
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	吉田 俊爾 ○解剖に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	理学療法士に必要な解剖学的知識は医学の基盤科目であり、人体の構造の習得に不可欠な骨学、筋学、脈管学、内臓学、神経学、感覚器、内分泌学と多岐にわたり分野を学ぶことで、理学療法の臨床的分野に応用できる解剖学的知識を習得することにある。特に前期は消化器、呼吸器、泌尿器、生殖器、内分泌についての基礎的知識の習得に努める。					
学習到達目標	1.内臓学に関する解剖学的基礎知識を習得する。 2.消化器・呼吸器・泌尿器・生殖器・内分泌の各分野を総合的に応用できる知識を習得する。 3.内臓学に関する解剖学的基礎知識を理学療法に応用できる基礎知識を習得する。					
授業内容	回	内 容		回	内 容	
	1-2	循環器系総論 肺循環と体循環		13-14	内臓学総論（実質臓器と中空器官） 消化器系（口腔から肛門までの経路）	
	3-4	心臓（外観と内部構造） 心臓（弁装置・心臓壁）		15-16	消化器系 1	
	5-6	心臓（刺激伝導系・心臓の血管ほか） 動脈系（動脈血の流れ） 1		17-18	消化器系 2	
	7-8	動脈系（動脈血の流れ） 2		19-20	呼吸器系	
	9-10	静脈系（静脈血の流れ） 門脈と奇静脈系（静脈血の特殊経路）		21-22	泌尿器系（腎臓と尿路） （泌尿器の流れ、腎臓の構造と働き）	
	11-12	胎児循環（流路と成人との比較） リンパ系（リンパ性器官・リンパ管の分布）		23-24	生殖器系（男性生殖器・女性生殖器） 内分泌系	
授業方法	講義と実習を併せて実施する。					
成績評価の方法	筆記試験（100％）					
履修上の留意点	基本的な内容を講義するので、確実に習得すること。					
教科書等	「標準理学療法学、作業療法学3版 解剖学」 医学書院 「ヴォルフ カラー人体解剖学図譜」西村書店					
参考図書等	「分担解剖学（第2・3巻）」金原出版					
関連科目	生理学、運動学、病理学などその他、多くの科目と関連する。					
コアカリキュラム対応	C-1-3					
最近の国試出題傾向						

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	解剖学Ⅲ			単位数	2	時間数	48
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	吉田 俊爾 ○解剖に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	理学療法士は、高齢者や事故などによる身体機能障害、脳卒中などによる麻痺など、身体的障害を持つ方々に対して、医師の指示の下、基本的動作能力の回復を図るために治療を行う者である。そのためには人体の構造と機能については十分な知識が必要となる。解剖学Ⅲは特に神経系および感覚器系の構造と機能について学び、リハビリテーションを行う上で必要な知識を習得することを目的とする。			
学習到達目標	神経系および感覚器系の構造と機能を学び、感覚器系の伝導路および運動器系の伝導路を理解することを目標とする。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	神経系を構成する細胞 シナプスの意味 神経系の区分	13-14	脳神経 1
	3-4	髄膜について 脳室系 脳脊髄液の産生と流路	15-16	脳神経 2 脊髄神経 1
	5-6	大脳半球の構造と機能の局在	17-18	脊髄神経 2
	7-8	間脳（視床、視床下部）、大脳核 脳幹 1（中脳）	19-20	自律神経系 嗅覚、味覚、外皮
	9-10	脳幹 2（橋・延髄） 小脳	21-22	視覚器
	11-12	運動系の神経路 感覚系の神経路	23-24	平衡聴覚器
授業方法	黒板への板書、および脳の模型による説明			
成績評価の方法	主に定期試験（100％）にて、判定する。			
履修上の留意点	理学療法士にとって神経系は非常に重要である。従って、積極的に授業に望んでほしい。			
教科書等	「標準理学療法学、作業療法学3版 解剖学」 医学書院 ヴォルフ カラー人体解剖学図譜」西村書店			
参考図書等	必要に応じてこちらからプリントを用意する。 「分担解剖学（第2巻）」金原出版			
関連科目	解剖学Ⅰ、解剖学Ⅱ、生理学Ⅰ、生理学Ⅱ、機能解剖学Ⅰ 機能解剖学Ⅱ、運動学、神経内科学Ⅰ、神経内科学Ⅱ			
コアカリキュラム対応	C-1-3			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	機能解剖学Ⅰ			単位数	1	時間数	24
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	小関 博久 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	1. 骨・筋・腱・靱帯・関節を主体とする運動器の解剖学的構造の知識だけでなく、運動が行われる際にはどのような変化がおこるかを理解する。 2. 関節の一般的な構造を理解した上で、下肢を中心とした関節およびその構成体の特徴を学び、関節を動かす筋の機能についてより細部にわたって理解することを目的としている。 3. 理学療法士が運動器リハビリテーションを円滑・安全・効果的に行うために必要な機能解剖学の知識を身につける。			
学習到達目標	1. 関節の一般的な構造と機能を理解する。 2. 膝関節および股関節の構造・機能・役割・動きを理解する。 3. 荷重位と非荷重位での膝関節および股関節周囲筋の機能や動きを理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【総論】 関節の分類と種類	11-12	【歩行】 歩行周期、歩行中の下肢筋活動
	3-4	【総論】 関節の構成と動き		
	5-6	【股関節各論】 股関節の構成体、股関節のROM		
	7-8	【膝関節各論】 膝関節の筋と機能		
	9-10	【膝関節各論】 半月板の移動		
授業方法	板書を中心に講義を行う。膝関節および股関節を中心とした人体構造や3次元的な動きを視覚的に捉えて理解することを目的としている。			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	機能解剖学はその後に履修する運動療法や整形外科、スポーツ外傷・傷害学、疾患別理学療法の基礎をなすため、広範囲かつ詳細な理解が重要である。			
教科書等	特に指定しない			
参考図書等	小関博久（編）『外来整形外科のための退行変性疾患の理学療法』 医歯薬出版			
関連科目	運動学・整形外科Ⅰ・Ⅱ、スポーツ外傷・傷害学（2年）、臨床スポーツ医学（2年） 整形外科Ⅱ（2年）			
コアカリキュラム対応	C-2-1			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	機能解剖学Ⅱ			単位数	1	時間数	20
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	小関 博久 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	1. 足関節・足と手関節・手の解剖学的構造を機能を視覚的に理解し、その関節を動かす筋の機能についてより細部にわたって理解することを目的としている。 2. 足関節と足部の構造は細かく複雑であり、機能面でも荷重時と非荷重時において関節の運動方向が大きく異なることを理解する。特に荷重時の運動では足関節・足の上に載る下肢・体幹の運動に大きな影響を与えることを理解させる。 3. 巧緻運動として高次元の運動が行われる手関節と手の構造を理解し、その複雑な運動を可能にしている筋の役割についても深く理解することを目的としている。			
学習到達目標	1. 足関節・足部の構造・機能・役割・動き・筋の機能を理解する。 2. 荷重位と非荷重位での足関節・足部の機能や歩行時の働きを理解する。 3. 手関節・手の構造・機能・役割・動き・筋の機能を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【足関節・足部各論】 足部の構成、距腿および距踵関節の構成		
	3-4	【足関節・足部各論】 足関節の運動、足関節の筋と機能		
	5-6	【足関節・足部各論】 足関節・足部の筋と機能		
	7-8	【足関節・足部各論】 足関節の安定性、歩行時足関節筋群活動		
	9-10	【手関節・手各論】 手関節と手の骨構成		
授業方法	板書を中心に講義を行う。足関節・足部および手関節・手を中心とした人体構造や3次元的な動きを視覚的に捉えて理解することを目的としている。			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	機能解剖学はその後に履修する運動療法や整形外科、スポーツ外傷・傷害学、疾患別理学療法の基礎をなすため、広範囲かつ詳細な理解が重要である。			
教科書等	特に指定しない			
参考図書等	小関博久（編）『外来整形外科のための退行変性疾患の理学療法』 医歯薬出版			
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ・整形外科Ⅰ・Ⅱ（2年）、スポーツ外傷・傷害学（2年）、臨床スポーツ医学（2年）、整形外科Ⅲ・Ⅳ（3年）			
コアカリキュラム対応	C-2-1			
最近の国試出題傾向	手関節・手および足関節・足部の周囲筋機能・起始・停止・神経支配、手根管、手のアーチ、手の変形、足関節の安定性や歩行時足関節筋活動などが頻出			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	機能解剖学Ⅲ			単位数	3	時間数	64
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	小関 博久 平田 史哉 多米 一矢 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	1. 肩関節・肘関節および脊柱、体幹部の解剖学的構造を機能を視覚的に理解し、その関節を動かす筋の機能についてより細部にわたって理解することを目的としている。 2. 体幹は両下肢の上に位置し、体幹の安定性は末梢部に影響を与える。体幹の構造と運動メカニズムを理解し、末梢部に与える影響を理解させる。また、体幹の構造の一部である腰部や胸郭の筋や構成、運動および安定化メカニズムを学ぶとともに、その上に位置する頭頸部についても理解を深める。また、体幹と密接に関連している最大の可動域を有する肩関節、その肩関節と手関節の間に位置する肘関節についても、その構成や運動および安定化メカニズムについて深く学習する。			
学習到達目標	1. 肩関節・肘関節の構造・機能・役割・動き・筋の機能を理解する。 2. 脊柱の一般的な構造と腰椎の特徴および機能・役割・動き・筋の機能を理解する。 3. 胸郭の構成や役割、動きについて学び、筋機能および体幹の安定化メカニズムを理解する 4. 頸椎の構成・特徴・動き・役割・筋機能について理解する			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【肩関節各論】 肩関節の構成・臼蓋上腕関節の構成	17-18	【胸郭各論】 胸郭周囲筋・インナーユニットの機能
	3-4	【肩関節各論】 臼蓋上腕関節周囲筋・肩甲上腕リズム	19-20	【胸郭各論】 胸郭周囲筋・インナーユニットの機能
	5-6	【肩関節各論】 肩甲上腕関節と肩甲胸郭関節の構成	21-22	【胸郭各論】 胸郭周囲筋・インナーユニットの機能
	7-8	【肩関節各論】 肩甲胸郭関節の筋、肩関節の指標	23-24	【頸椎各論】 頸椎の解剖と運動・椎間板への応力
	9-10	【肩関節各論】 肩甲胸郭関節の筋、肩関節の指標	25-26	【頸椎各論】 頸椎の屈筋群と伸筋群の役割
	11-12	【脊柱総論】 脊柱の基本形態と構成体・制動要素	27-28	【頸椎各論】 頸椎の屈筋群と伸筋群の役割
	13-14	【腰椎・下部体幹各論】 腰椎の解剖・伸筋群と屈筋群の機能	29-30	【総括Ⅰ】 肩関節複合体について
	15-16	【腰椎・下部体幹各論】 腰椎の解剖・伸筋群と屈筋群の機能	31-32	【総括Ⅱ】 脊柱について
授業方法	板書を中心に講義を行う。足関節・足部および手関節・手を中心とした人体構造や3次元的な動きを視覚的に捉えて理解することを目的としている。			
成績評価の方法	筆記試験（100％）			
履修上の留意点	機能解剖学はその後に履修する運動療法や整形外科、スポーツ外傷・傷害学、疾患別理学療法の基礎をなすため、広範囲かつ詳細な理解が重要である。			
教科書等	特に指定しない			
参考図書等	小関博久（編）『外来整形外科のための退行変性疾患の理学療法』 医歯薬出版			
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ・整形外科Ⅰ・Ⅱ（2年）、スポーツ外傷・傷害学（2年）、臨床スポーツ医学（2年）、整形外科Ⅲ・Ⅳ（3年）			
コアカリキュラム対応	C-2-1			
最近の国試出題傾向	手関節・手および足関節・足部の周囲筋機能・起始・停止・神経支配、手根管、手のアーチ、手の変形、足関節の安定性や歩行時足関節筋活動などが頻出			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	生理学Ⅰ			単位数	2	時間数	40
科目区分	基礎分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	市野 素英 ○生理学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	生理学は、人体の機能（からだの働き）を学習する科目である。 扱う内容は広範囲に亘るが、いずれも他の教科の履修に必要な基礎知識となる。 便宜的に、生理学を「生理学Ⅰ（前期）」と「生理学Ⅱ（後期）」に分ける。			
学習到達目標	1. 各器官系を構成する細胞の構造と機能を理解する。 2. 各器官系の構造と機能を理解する。 3. 神経系および内分泌系による各器官系の調節システムを理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【細胞の構造と機能】 細胞膜、細胞小器官、物質輸送、 細胞間・細胞内の情報伝達、活動電位	11-12	【排泄－１】 腎臓、ネフロン、尿の生成 尿路、膀胱
	3-4	【体液－１】 体液概論 血漿、赤血球	13-14	【排泄－２】 排尿反射 排便反射
	5-6	【体液－２】 白血球、免疫 血液凝固、血液型	15-16	【体液の酸塩基平衡】 アシドーシス、アルカローシス 呼吸性代償、腎性代償
	7-8	【呼吸－１】 呼吸運動、ガス交換、ガスの運搬 肺胞、肺容量の分画、努力肺活量	17-18	【消化・吸収－１】 内臓平滑筋、消化管運動 咀嚼・嚥下、胃
	9-10	【呼吸－２】 呼吸の神経性調節、呼吸の化学的調節 運動時の呼吸	19-20	【消化・吸収－２】 脾臓、肝臓、胆嚢、小腸、大腸 栄養素の消化・吸収
授業方法	スライドや配付資料を用いた講義			
成績評価の方法	筆記試験70%、小テスト30%			
履修上の留意点	生理学で履修する「からだの働き」は、はさまざまな現象が、構造的かつ時間的に連関して成り立っている。一つの現象を理解できないと、それに繋がる事象が理解できない。結果的に生理学が理解できなくなる。			
教科書等	岡田隆夫・長岡正範 共著 『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学第4版』 医学書院			
参考図書等	解剖学や運動学の教科書を参照すること。基本的な事項は、高等学校の生物学の教科書・参考書で復習するとよい。			
関連科目	解剖学(1年)、病理学（1年）、内科学（2、3年）、整形外科（2、3年）、神経内科学（2、3年）			
コアカリキュラム対応	C-1-1,C-1-2			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	生理学Ⅱ			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	市野 素英 ○生理学に関する実務、教授活動などの経験に基づいた講義						

授業の概要	生理学は、人体の機能（からだの働き）を学習する科目である。この科目を受講した学生は、アミノ酸とタンパク質、糖質や脂質の構造と機能について説明できるようになる。また、内臓各器官の構造と機能についても説明することができるようになる。さらに、神経系の興奮や各器官の役割についても理解する。			
学習到達目標	・三大分子の構造と機能について理解する。 ・各器官系の構造と機能を理解する。 ・神経系および内分泌系による各器官系の調節システムを理解する。			
授業内容	回	内容	回	内容
	1-2	【三大分子の構造と機能について】 物質代謝、エネルギー代謝、呼吸商 体温調節、アミノ酸、タンパク質など	11-12	【末梢神経系－2】 シナプス、興奮の伝達、伝達物質 神経筋接合部、自律神経系
	3-4	【内分泌－1】 視床下部、下垂体、甲状腺、上皮小体 副腎皮質、副腎髄質	13-14	【中枢神経系－1】 脊髄、筋受容器、脊髄反射 脳幹、姿勢反射、自律神経中枢
	5-6	【内分泌－2】 膵臓、性腺、消化管、腎臓 松果体、ビタミン	15-16	【中枢神経系－2】 小脳、視床、視床下部、基底核、辺縁系 大脳皮質、運動野、感覚野、脳波
	7-8	【生殖と発生】 男性生殖器、女性生殖器 受精、着床、出産	17-18	【感覚－1】 感覚受容器、感覚単位、受容器電位 体性感覚、内臓感覚
	9-10	【末梢神経系－1】 ニューロン、軸索、興奮の伝導 伝導速度、閾値、神経線維の分類	19-20	【感覚－2】 特殊感覚、視覚、聴覚、平衡感覚 味覚、嗅覚、感覚伝導路
授業方法	スライドや配付資料を用いた講義			
成績評価の方法	筆記試験70%、小テスト30%			
履修上の留意点	生理学で履修する「からだの働き」は、はさまぎまな現象が、構造的かつ時間的に連関して成り立っている。一つの現象を理解できないと、それに繋がる事象が理解できない。結果的に生理学が理解できなくなる。			
教科書等	岡田隆夫・長岡正範 共著 『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学第4版』 医学書院			
参考図書等	解剖学や運動学の教科書を参照すること。 基本的な事項は、高等学校の生物学の教科書・参考書で復習するとよい。			
関連科目	解剖学(1年)、病理学（1年）、内科学（2、3年）、整形外科（2、3年）、神経内科学（2、3年）			
コアカリキュラム対応	C-1-1、C-1-2			
最近の国試出題傾向	生理学の全範囲に亘って出題されている。 出題頻度が高い分野は、神経系、感覚、骨格筋などである。			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	運動学Ⅰ			単位数	3	時間数	64
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	高柳 清美、原田 憲二 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	1. 本科目では、関節力学、歩行など、理学療法士にとって必要となる運動学の知識を習得する。			
学習到達目標	1. 関節力学についての理解を深める。 2. 姿勢の表現、評価についての理解を深める。 3. 歩行の観察、評価についての理解を深める。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【概論】 ・運動学とは ・運動学の歴史	17-18	【肩関節】 ・肩関節の解剖、運動学など
	3-4	【生体の構造と機能】 ・関節のの構造と機能 ・腱および靭帯の構造と機能	19-20	【肘関節】 ・肘関節の解剖、運動学など
	5-6	【股関節】 ・股関節の解剖、運動学など	21-22	【肘関節】 ・肘関節の解剖、運動学など
	7-8	【股関節】 ・股関節の解剖、運動学など	23-24	【手、指節関節】 ・手関節の解剖、運動学など
	9-10	【膝関節】 ・膝関節の解剖、運動学など	25-26	【脊柱】 ・椎間関節の解剖、運動学など
	11-12	【膝関節】 ・膝関節の解剖、運動学など	27-28	【姿勢制御】 ・重力と姿勢 ・姿勢制御機構
	13-14	【足関節】 ・足関節の解剖、運動学など	29-30	【姿勢制御】 ・重力と姿勢 ・姿勢制御機構
	15-16	【肩関節】 ・肩関節の解剖、運動学など	31-32	【歩行】 ・正常歩行のメカニズム
授業方法	講義と実習を併せて実施する。			
成績評価の方法	筆記試験(80%)、レポート(20%)			
履修上の留意点	動きやすい服装での参加が望ましい。			
教科書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック			
参考図書等	資料配布			
関連科目	解剖学(1年)、生理学など、その他、多くの科目と関連する。			
コアカリキュラム対応	C-2-1,C-2-2,C-2-3,C-2-4			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	人間発達学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	谷出 敦子						

授業の概要	医療・福祉現場においては人の誕生から死までの全生涯を扱い、各段階における状態像や課題に触れることから、発達に関する知識は不可欠である。本科目では、胎児期、乳幼児期、小児期、青年期、成人期、老年期といったライフステージを通した人間発達を理解することを目的とする。			
学習到達目標	・胎生期、乳幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期、それぞれにおける発達過程について説明することができる。 ・人間発達における各機能の発達について、説明することができる。 ・社会生活活動の発達について、説明することができる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	発達の概念 人間発達における各機能の発達① （身体・姿勢・移動動作の発達）		
	3-4	人間発達における各機能の発達② （目と手の協調の発達、認知機能の発達）		
	5-6	社会生活活動の発達 （食事動作の発達、排泄行動の発達、更衣・整容動作の発達）		
	7-8	発達の諸段階と発達課題① （胎生期、乳児期、幼児期、児童期）		
	9-10	発達の諸段階と発達課題② （青年期、成人期、老年期）		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(80%)ならびに課題レポート(20%)			
履修上の留意点	発達について、複数の視点から捉えるよう意識して臨むこと。			
教科書等	資料を配布する			
参考図書等	「標準理学療法学・作業療法学 人間発達学 第2版」医学書院			
関連科目	小児科学(3年)、疾患別理学療法Ⅳ(3年)、疾患別理学療法Ⅶ(3年)			
コアカリキュラム対応	C-3-1,C-3-2,C-3-3,C-3-4,C-3-5,C-3-6,C-3-7			
最近の国試出題傾向	例年、数問の出題あり (小児、正常発達など)			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	病理学			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	伊藤 春雄 ○臨床現場の実務経験を活かした講義						

授業の概要	病理学は疾病の原因とその成り立ちについての学問である。本科目では、各々の疾病に関して進行・予後を知るために、その原因と生体反応について理解することを目的とする。			
学習到達目標	・細胞・組織損傷、炎症、感染、呼吸器障害、循環障害、栄養・代謝障害、腫瘍、廃用症候群について説明することができる。 ・疾病の定義と分類について説明することができる。 ・病因論や病理学的変化について説明することができる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	病因とは 進行性病変 退行性病変		
	3-4	代謝異常（栄養の基礎含む） 循環障害 免疫 アレルギー 放射線障害		
	5-6	老化 炎症		
	7-8	感染症 腫瘍①		
	9-10	腫瘍② まとめ		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）に課題ノートを加味して評価する。			
履修上の留意点	下記関連科目との関わりを意識しながら学んでいくこと。			
教科書等	「標準理学療法学・作業療法学 病理学 第4版」医学書院			
参考図書等	「ロビンス基礎病理学 原著7版」丸善出版			
関連科目	解剖学Ⅰ（1年）、解剖学Ⅱ（1年）、解剖学Ⅲ（1年）、生理学Ⅰ（1年）、生理学Ⅱ（1年）			
コアカリキュラム対応	C-4-1,C-4-2,C-4-3,C-4-4,C-4-5,C-4-6,C-4-7,C-4-8,C-4-9,D-1-2,D-2-1,D-14-2			
最近の国試出題傾向	例年、数問が出題 (炎症、感染症、腫瘍が頻出)			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	リハビリテーション概論			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門基礎分野	対象年次	1	学期	通年	授業形態	講義
担当講師	小野 晋 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	1. 本科目の目的は「リハビリテーションとは何か」という根幹に触れ、理学療法士としてどのような心構えが必要であるかなどについて考えを深化させることである。 2. 関連職種の役割にも触れ、チーム医療の意識を持ちリハビリテーションに携わることのできる能力を習得する。			
学習到達目標	1. リハビリテーションとは何かを説明できる。 2. リハビリテーションに関わる疾病、社会保障制度、関連職種について、概要を説明できる。 3. リハビリテーションの段階と、それに準ずる心理について説明できる。 4. 地域リハビリテーションについて説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	リハビリテーションとは ・リハビリテーションの定義、目的、理念歴史など	11-12	リハビリテーションの過程 ・評価、プログラム、手段など ・チームアプローチと多職種連携の理解
	3-4	病気と障害 ・病気と障害の関係など	13-14	機能障害をもたらす主な疾病と外傷 ・身体障害、精神障害、知的障害など
	5-6	人間活動と発達 ・発達、ノーマライゼーションなど ・ライフサイクルにおける発達の特色など	15-16	【リハビリテーションを支える社会保障制度】 ・保健・医療制度、社会保険制度など ・高齢者対策など
	7-8	リハビリテーションと心理 ・心理的適応の過程など ・障害受容など	17-18	地域リハビリテーションについて ・自立支援、就労支援など
	9-10	リハビリテーションの諸段階 ・発症から社会生活など	19-20	高齢者との接し方 ・高齢者の特徴、接し方など
授業方法	講義、グループワーク			
成績評価の方法	筆記試験で評価する（100％）。			
履修上の留意点	他科目との関連を考慮しながら、受講することを求める。			
教科書等	資料配布			
参考図書等	理学療法ハンドブック、リハビリテーション概論			
関連科目	理学療法概論(1年)、理学療法評価概論(1年)その他、多くの科目と関連します。			
コアカリキュラム対応	D-3-1,D-3-2,D-3-3,D-3-4			
最近の国試出題傾向	ICF、ノーマライゼーションなどが散見される。			

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	理学療法概論			単位数	2	時間数	40
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	高江洲 潤 佐野 純平 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	わが国における理学療法の歴史は浅く、未だ組織として十分に社会的に認識されているとはいえない。今後の理学療法の発展を考える場合、個々の理学療法士の態度や職務の実践が大きな役割を果たすことに議論の余地はない。本科目の目的は、これからの理学療法のあり方を考えることを目的とする。			
学習到達目標	・理学療法の定義について説明できる。 ・理学療法士に求められるさまざまな役割、法的義務について説明できる。 ・良質な理学療法の提供に向けて質を保証する必要性、生涯にわたる自己研鑽の必要性が説明できる。 ・理学療法士及び作業療法士法について説明でき、医師法や保健師助産師看護師法との関係について説明できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【理学療法士としての適性】 ・適性の基本概念など ・理学療法の質の保証	11-12	【理学療法士の法律制度】 ・理学療法士身分制度の意義 ・法的使命と役割
	3-4	【理学療法学教育】 ・理学療法カリキュラムの変遷など ・生涯学習の有意義性	13-14	【理学療法士の役割と職域】 ・日本における現状など
	5-6	【理学療法の歴史】 ・近代医療における理学療法など	15-16	【理学療法の学問的体系化と研究法】 ・学問的体系化の歩みなど ・理学療法における研究の意義
	7-8	【理学療法の対象と治療手段】 ・代表的対象に対するアプローチ	17-18	【理学療法と倫理・哲学】 ・職業倫理、医療倫理など
	9-10	【理学療法の基盤】 ・理学療法に関わる国際分類など	19-20	【理学療法部門における管理】 ・理学療法部門の管理など ・安全性の管理
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験(100%)にて評価する。			
履修上の留意点	理学療法の全体像について理解しておくことが望ましい。			
教科書等	資料配布			
参考図書等	奈良勲 『理学療法概論 第5版』 医歯薬出版株式会社 嶋田智明 『概説理学療法』 文光堂			
関連科目	理学療法評価概論(1年)、リハビリテーション概論（１年）その他、多くの科目と関連する。			
コアカリキュラム対応	A-1-1,A-1-2,A-1-3,A-1-4,A-2-2,A-4-1,A-4-2,A-5-1,A-5-2,A-5-3,B-4-4,B-5-1,B-5-2,B-5-3,B-5-4,B-6-3,E-1-1			
最近の国試出題傾向	国際生活機能分類、理学療法士及び作業療法士法に関連する問題は頻出である。			

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	運動療法基礎学Ⅰ			単位数	1	時間数	24
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	前期	授業形態	講義
担当講師	原 隆之 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	1. 運動療法は、理学療法の最も大きな柱として位置付けられている。解剖学や生理学、運動学あるいは病理学などを背景に、理学療法士が得意としなければならない分野である。 2. 本科目の目的は、2～3年次に学ぶ各論に向けて、運動療法の基礎的な知識を習得することである。			
学習到達目標	1. 運動療法の歴史を振り返り、現代の運動療法の背景を知る。 2. 運動療法の目的、対象、方法を理解する。 3. 運動に関連する諸要素を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【運動療法の概念】 ・歴史、代表的な器具の紹介など ・目的、定義、種類など	11-12	【呼吸・循環・代謝の基礎】 ・呼吸・循環のメカニズムの導入 ・代謝のメカニズムの導入
	3-4	【運動療法の基礎】 ・関節の構造と運動など ・関節可動域制限の分類		
	5-6	【運動療法の基礎】 ・筋収縮のメカニズムなど ・筋力低下の分類		
	7-8	【運動療法の基礎】 ・随意運動・運動制御のメカニズムなど		
	9-10	【運動療法の基礎】 ・運動学習など		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（100％）で評価する。			
履修上の留意点	解剖学・生理学と平行して学習すること。			
教科書等	資料配付			
参考図書等	基礎運動学 理学療法ハンドブック 奈良勲 『標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論 各論 第3版』 医学書院			
関連科目	解剖学(1年)、生理学Ⅰ・Ⅱ(1年)、運動学(1・2年)、病理学(1年)などその他、多くの科目と関連します。			
コアカリキュラム対応	C-2-1,C-2-3,C-2-4			
最近の国試出題傾向				

理学療法学科 | 部 シラバス

科目名	理学療法評価概論			単位数	1	時間数	20
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	講義
担当講師	原田 憲二 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	評価とは、患者の症状や障害を把握して将来を予測する過程である。評価は、誰が行っても同一の結果が得られるような方法であり、信頼性や妥当性のある標準化されたものが求められる。本科目では、理学療法評価の概論的な部分や方法論などを理解することを目的とする。			
学習到達目標	1. 理学療法における評価のあり方を理解する。 2. 理学療法における評価の目的を理解する。 3. 理学療法における評価の重要性を理解する。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	【評価の対象】 障害について（ICFなど）		
	3-4	【評価の対象】 評価の対象について		
	5-6	【評価の目的・意義・過程】 評価の目的・意義・過程について		
	7-8	【評価の内容】 評価内容・時期・統合解釈について 問題抽出・目標・治療計画について		
	9-10	【評価の内容】 診療記録（SOAP）について		
授業方法	講義形式			
成績評価の方法	筆記試験（80％）、小テスト（20％）			
履修上の留意点	教科書、参考図書に目を通しておくことが望ましい。			
教科書等	松澤正『理学療法評価学』改訂第4版 金原出版			
参考図書等	細田多穂 理学療法ハンドブック			
関連科目	検査測定学(1・2年)、理学療法概論(1年)、リハビリテーション概論(1年)、総合臨床実習Ⅰ・Ⅱ(4年生)			
コアカリキュラム対応	E-3-1			
最近の国試出題傾向	ICFなどは頻出傾向である			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	検査測定学Ⅰ			単位数	1	時間数	44
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	実習
担当講師	佐野 純平 植竹 駿一 ○理学療法士の実務経験に基づく講義						

授業の概要	人の身体運動は個々の関節運動により構成されており、人の動作を的確に捉えるには、関節の運動域（関節可動域）を知る必要がある。本科目では、対象者の関節可動域の測定を、正確かつ迅速に測定する技術を習得することを目的とする。また、関節可動域の原因やその改善方法まで考えられる力を養う。			
学習到達目標	・ 関節可動域測定における基本軸・移動軸・参考可動域を説明できる。 ・ 関節可動域測定の手技や手順を実施できる。 ・ 関節可動域の制限となる因子について説明できる。 ・ 関節可動域制限の程度と関連要因を把握する評価が実施できる。			
授業内容	回	内 容	回	内 容
	1-2	総論 (関節可動域測定の定義と目的)	13-14	下肢の測定② (足、足部について)
	3-4	参考可動域 関節可動域測定と制限因子	15-16	下肢の測定③ (母指、足指について)
	5-6	上肢の測定① (肩甲帯、肩、肘、前腕について)	17-18	体幹の測定① (胸腰部について)
	7-8	上肢の測定② (前腕、手について)	19-20	体幹の測定② (頸部について)
	9-10	上肢の測定③ (指、母指、別法について)	21-22	臨床応用 (代償運動への対応/各変形に対する測定)
	11-12	下肢の測定① (股、膝について)		
授業方法	実技形式			
成績評価の方法	筆記試験(50%)ならびに実技試験(50%)			
履修上の留意点	実習着着用、医療人としてふさわしい身だしなみで授業に参加すること(頭髮、爪、装飾品など)			
教科書等	「理学療法評価学 改訂第6版」金原出版			
参考図書等	「ROM測定法」MEDICAL VIEW 「基礎運動学 第6版 補訂」医歯薬出版			
関連科目	解剖学Ⅰ(1年)、機能解剖学Ⅰ(1年)、機能解剖学Ⅱ(1年)、運動学Ⅰ(1年) その他多くの科目と関連			
コアカリキュラム対応	E-4-1			
最近の国試出題傾向	例年、実地問題を含む7～8割が出題 (基本軸、移動軸、参考可動域、代償運動など)			

理学療法学科Ⅰ部 シラバス

科目名	見学実習			単位数	1	時間数	45
科目区分	専門分野	対象年次	1	学期	後期	授業形態	実習
担当講師	理学療法学科専任教員／実習施設指導者 ○理学療法士の実務経験に基づく指導						

授業の概要	見学実習では、実際に病院やクリニックに赴いて、理学療法士の役割・対象者との関係性の構築・他部門との関わり方などについて見学する。その中で、理学療法現場における清潔で適切な身だしなみ・共感的態度・ルール遵守などの重要性を理解する。
学習到達目標	・理学療法士と対象者の関係性の構築方法を理解する。 ・他部門との関わり方を見学し、チーム医療の重要性を理解する。 ・理学療法の進め方を理解する。
授業内容	内容 朝のカンファレンスの見学 患者の迎え方 情報収集の方法 理学療法(評価・物理療法を含む)の実際 他部門との協働 問題が生じた場合の対応方法 その他 これらを見学し、理学療法士としての働くうえでの1日の流れ・理学療法士の存在意義などについて学ぶ。
授業方法	実習形式
成績評価の方法	臨床実習報告書の内容から評価を点数化し成績とする。
履修上の留意点	事前に主たる疾患についての予習しておくことが望ましい
教科書等	特になし
参考図書等	特になし
関連科目	コミュニケーション論 地域リハビリテーション実習
コアカリキュラム対応	F-1～4
最近の国試出題傾向	対象者との信頼関係の結び方などは毎年出題される。